

# 曼殊般若波羅蜜多經の研究

渡 邊 棊 雄

## 一、曼殊般若の佛典としての位置

曼殊般若は所謂大乘經典中の最原始の一團たる般若部の一である。而してその般若部は玄奘譯の般若經全集たる六百卷大般若の初五會及びそれらの相應を大部根本般若と稱し、同後十一會並にそれらの諸相應乃至爾餘すべての般若經を一括して小部枝末般若と名づける中、又曼殊般若はその後者即ち小部枝末般若に屬する。

## 二、曼殊般若の諸傳本

曼殊般若は現に概言して五本を相傳する。左にその一、一を略述して見よう。

一、原梵本。「聖七百頌と名づくる般若波羅蜜多經」(Arya Saptaśatikā nama Prajñā amita sūtra)と云ふ。貝葉本として傳へ、未だその刊行本を見ない。

二、西藏譯。「聖般若波羅蜜多七百頌大乘經」(Sū-rab-kyi pha-ro-lu phyin-pa bdun-brgya-pa—谷大目錄 No. 737; Hpiags-pa sū-rab-kyi pha-ro-lu phyin-pa bdun-brgya-pa shes-bya-ba theg-pa chen-pchi mdo—東北大目錄 No. 24) と稱し、北京版、デルゲ版、ナルタン版等に各所傳がある。但し何れも新訂、刊定、共に失名である。

三、漢譯(一)。扶南國の沙門曼陀羅 (Mudra—梁言「弘弱」) 譯、大正 No. 232 文殊師利所說般若波羅蜜經…卷。梁の武帝、天監の年の初(實は四二年—538A.D.) 譯。經錄の言ふ所に從へば(內典錄四—大正 55, p. 265, 266)、曼陀羅仙は當時尙梁言を善くせず、爲に恰も在支已に年ある釋經三藏僧伽婆羅 (S. Triśatana) の助を受けて楊都に是を譯すと。大正大藏經八の般若部四に攝む。大寶積經第四六會、文殊說般若會に再び出づ(大正 II—p. 650ff.)。

四、漢譯(二)。僧伽婆羅(梁言「僧養」亦云「僧鎧」) 譯、大正 No. 233 文殊師利所說般若波羅蜜經一卷。僧伽婆羅は右已出の如く、曼陀羅仙を けて一度これを譯したのであるが、曼陀羅の没後、曼陀羅の齋す所の梵本を概ね引受けて漢譯したといふその一である。僧伽婆羅の傳によれば、彼はまた阿毘曇心論の研究者且つ漢譯者で、その影響は明にこの譯にも現はれ、右の曼陀羅仙譯等にはたゞ「諸法」といふ所を、この譯には「五陰、十二處、十八界」といつたり、總じて有部的、阿毘達磨的煩瑣學術臭は少しとせぬ。この譯獨り一卷に作り、大正藏經にはその第八、般若部四に上の曼陀羅譯と同攝する。

五、漢譯(三)。玄奘譯大正 No. 234 六百卷大般若第七會曼殊室利分二卷(卷五七四—五)。玄奘が唐の顯慶五年(660

A.D.) 正月朔日より同龍朔三年 (633 A.D.) 十月十二日まで、約四ヶ年の日子を以て譯畢したものである。

### 三、曼殊般若の名義

般若經といへば須菩提 (Subhūti) 玄奘は「善現」尊者を想起し、空觀といへば須菩提尊者を思ひ浮ぶ。それほど般若空佛敎には最原始佛典以來關係の深いのが須菩提尊者である。然るに、さうした須菩提尊者の位置をこの曼殊般若に於ては取つて代つたのが大乘代表の菩薩たる曼殊師利 (又は文殊師利 Manjushri) であつて、經を終始し、空觀開説の最も主働的位置は悉く曼殊菩薩の關する所である。従てその爲に經の題名の有る所なのは知るに足る。但し古くは梵本にもその曼殊般若の經名があつた爲に、漢譯にも然う傳へるのであらうが、今日の梵本を初め藏本等は悉くその形色的頌數より、稱して「七百頌般若」とすることは般若部最大の十萬頌般若以降、二萬五千頌、一萬八千頌、一萬頌、八千頌等に順じたものといへよう。

### 四、曼殊般若の組織

曼殊般若は全局を總括して七百頌より成り、それが爲に「七百頌般若」と名づけられることのあるのは今いふ通りである。而も小本であるから品別を設けず、一貫して散文より成り、會て韻文を交じえぬ。漢譯では、曼陀羅、玄奘の兩譯は二卷に作り、僧伽婆羅だけは獨り一卷にしてゐる。玄奘譯には十六會の各に必ずある例により、西明寺玄則の序を附し、中に「一相假名の法門」を明かす所なるをのべてゐる。

これを内容的にいへば——まづ佛が例により、舍衛城誓多林給孤獨園に住せられて、大比丘衆、大菩薩衆と共にするがその書出しである、而して次の諸菩薩、諸大聲聞等が相次いで晨朝佛所に詣り、佛が最初舍利弗に、次では曼殊にその何故に詣るやを問はれ、佛を往觀親近せむと欲する者にやと尋ねられたので、曼殊は然りと對へ、且つそは偏へに利益衆生の爲であるとしたのを全體の出發點とする。全局を二大段に分けて考へ得るので、漢譯に上下二卷を分つことになつたのであるが、更に細かくいへば、その前半は大要十五段に分割すべく、且つ後半は同じく十四段にまづ別觀し得ようといふが卑見である。前後を通じ、その内容解説は著しく有機的で、前後の細分段間に於ける緊密な説相は讀者をして心臓に自らの響あるを感ぜしめる。活躍人物としては——居並び大名的に、劈頭、諸大聲聞、諸菩薩摩訶薩の諸經共通なる列名がある外に、——既述の通り、曼殊菩薩がまづ最第一の活躍を爲し、そのワキ役は専ら舍利弗がこれを務める。而してその他にも阿難が初半末尾の流通分の所に現れて來、又、後半に入つて大迦葉も出て來れば、帝釋天は前後兩分を通じてチヨキく顔を現し、後半最後の流通分中にもまた活動してゐる。かくして、これらの點では、已にいへる須菩提の、全くその影を見せないことが般若部の一として異色めるを思はせる所である。

## 五、曼殊般若の成立

右いつた通り、曼殊般若は全體を二大分して考へ得る。而もそれをもつと立ち入つて考察すれば、かゝる二分は可成り本質的なものがあるのであつて、前分後分共に末尾に結文を有する。即ち前分の末には般若諸會お定りの如くに、阿難

が出て来て天地は六種に震動し、衆多比丘が心、解脱を得、同じく尼、優婆塞、優婆夷、諸天が淨法眼を得たとし、また後半の終にも、帝釋を上首とする三十三天が香華を散じ、音樂を奏し、常聞說法を希ひ、而して、これらに對して佛も自ら帝釋を讚歎せられ、且つ如來の大神通威徳が般若波羅蜜多を護持するであらうことをのべられると記してゐる。かくして考ふれば、この曼殊般若は或は是の兩段別によつての異時累積の成立では無かつたであらうか。而してこの種の成立を外にしては、所謂大部諸般若に望め、後に記する如く、曼殊般若の空佛教解説は頗る調和的でまた巧妙であるけれども、而も大部諸般若に見るやうな論證は全く豫想したやうな形になつてゐるので、彼れ此れ、大部諸般若を豫想して、その後に成立したことを想見せしめる事實を想浮べさせられる。而も、かゝるものとしての兩者の間隔は恐らく左程大きくは無かつたこととなるべく、曼殊般若の空説明の美しさは確にそれを推測させるに餘ある趣を有する。かくて、已にいへる如く、曼殊般若が小部枝末的般若の一に攝められる所以もこれらの事情によつてこれを知るに足るであらう。而して、終に曼殊般若の作者、時處等のすべては想像だも許されないこと、例によつて佛教諸經典共通の事實で、無論亦多く言を加へる必要もない。

## 六、曼殊般若の内容

曼殊般若は從來餘りもてはやされたとは決していふことが出来ぬ。けれども、已にのべた所でも解るやうに、その般若佛教中の一經典としての意義は頗る大で、空觀解説の如何にも有機的にもまた巧みな上に、丁度經の大きさからいつでも手頃なので、宛然たる一の好適なる教科書たるに足りる。たゞ前いへる如き前分後分の可成り本質的な分段があるあ

にはあるが、それも必ずしもさう甚しく介意する必要はない。今、次に經の梗概を明にすべく、卑見に従つて一段一段、内容の一般を示すこととしよう。

(一) 前分

一、已述のやうな全體的出發點の後を受けて曼殊が「我如來を觀奉る如きは」といふので、「卽是真如相、無動、無作、無所分別、無異分別、非即方處、非離方處、非有、非無、非常、非斷……」等と正しく百非四絶の筆致をもつて如來諸法の實相を宣説する。その口吻裡には明に龍樹の、中論中に於ける八不の偈を想起させて餘あるものが存する。

二、右のやうな説をなして後、曼殊は引續き——是の如く觀奉ると雖も、實は都べて所見無く、また所著も無いとて空佛教を解説する。而してその理由として、一切皆空中には見るべきものもなく、能く見る者自らも無い。まして況んや所著をや等と説いてゐる。

三、曼殊はまた——かやうに所見無く、所取も無くして而も如來に親近恭禮し奉る所以の者は諸の有情に對し化導利益を思ふに由る。然しその利樂有情は實には不必要なことで、一切有情は本性離にして諸法は畢竟不可得であると重ねて空觀を敘する。かくて——左様に不可得自性離の有情の施設は單なる假のものなるのみとし、諸の有情の數、量、所屬、所住を説く。

四、曼殊が更に語を續けて、——かゝる所住、即ち有情の住する所もまた畢竟空なることに併せて、般若修學がまた同じく、空無所住なるを敘し、かやうに般若を修學するとき、善惡には増減無く、一切法悉く増減あること無く、

有情は別に異生凡夫の性を捨するのでもなければ、一切佛法を攝する譯でもなく、要するに、般若修學には捨法得法の何れもあることは無い。生死の過失を厭離するのでもなければ、涅槃の功德を欣樂するのでもなく、諸法に勝劣、得失、取捨を認めず、眞如、法界、法性、實際に於いては都べて勝劣あることは無いと宣する。

五、同じく曼殊の説く——已に一切法に勝劣が無く、眞如實際に於いて勝劣がないなら、佛法にも亦勝劣はあることなく、それは無上にして未だ必ずしも無上と説くべからずとなし、かくて再び、般若修學の時には、凡夫異生の法も聲聞、緣覺、佛菩薩の三乘法も悉く分別せず、恩怨も無く、一切法性は是れ平等であると説明する。よつて佛は曼殊のかゝる説を歎ぜられ、菩薩大士の爲の眞法師、二乗増上慢人の爲の大法師であると讃ぜられる。

六、曼殊は恭敬合掌して、更に甚深般若を説くやう許されむことを請ひ奉り、——法は可住に非ず、不可住に非ず、雜染を見ず、清淨を見ず、佛法と非佛法とを見ず——と稱し、——諸法は畢竟空、不可思議にして、一切法すべて、佛法菩薩法に順ぜざるは無い——と結むのである。

七、曼殊の續説で、——佛法は空だから趣求すべからず、成就も亦あることはない。それは性として無著である。従つて諸佛の菩提座に於けるも坐の義無く、況んや曼殊自らが能く坐するなどのことは素より無い——曼殊がかやうに説いたとき、それを隨喜して、舍利弗、彌勒並に無緣慮（玄奘譯。曼陀羅は「無相」、僧伽婆羅は「無緣」とよぶ女人等の三者が相次いで空佛教を歎じ、最後に佛も同じく空觀般若を讃ぜられたる後、——曼殊の右の如き空佛教解説に接せる舍利弗初め諸の有情らは六波羅蜜、轉た圓滿するであらう——とものべられる。

八、佛が翻つて、——已に曼殊にして右のやうに空觀。説くならば、何が故ぞ無上菩提に於いて證を欲するや——と問はれる。すると曼殊は再び空觀を高調して——自らは無上菩提に於いて住心なし。況して證を欲せむや——と對へ、菩提即是我、我即是菩提で、敢へて趣求すべき謂なしとする。佛は聞かれて讚じ玉ひ、——汝は先佛に於いて多く善根を種え、久しい間、無得に依らむことを願つたものだ——といはるゝや、曼殊は更に空佛敎を力説して——法もし可得ならば、無得あつて應に可依なるべし。而も法は本より可得無し。故に無得の可依なるもの有ることはない——と、いさゝか佛をへこまし奉つたかの態度を示してゐる。

九、佛が、曼殊に向つて——佛に於いて三乘の徳を認むるやと問はれる。曼殊は對へ奉りて——三乘は異生凡夫でなく、聖者でなく、乃至、大に非ず、小に非ず、已調伏に非ず、未調伏でもない。自らは菩薩も見ないし、菩薩法と菩薩行と、趣菩提法、能證菩提者と、以上悉くあることがない——とした。よつて、舍利弗が——然らば、佛とは何ぞ——となじつたので、曼殊は、——佛と我と共に假の施設に過ぎぬ。菩提、名字もまたすべて然りて、佛の本性は無來、無去、無生、無滅乃至たゞ微妙の智もて内に自ら證知すべきもののみと答へる。

一〇、舍利弗は——曼殊の如上の説明は到抵、初學の者の能く解する所ではない——といふや、曼殊は——そればかりではない、阿羅漢だつて同じことだ。いな、菩提の相はもと識の可識なるものではない。だから、諸の菩薩だつて能くこれを知らない。況んや二乘をや——とし、二乘の蔑視を垣間見せながら空觀を續けて説く。

一一、舍利弗これを聞いて、——果して然らば、佛は法界即ち諸法の自性を證するか——と尋ねる。すると曼殊は——

佛は即ち法界、法界は即ち佛なりとなし、——故に佛は法界を證せず、寧ろ證する必要はない。又證の事實のある容もない。——と教説し、——一切法は即ち空、空は即ち法界、法界は即ち菩提であつて、何れも離相であり、佛の境界である。かくしてかやうな法界と菩提との二者は無二、無別である——として空觀を繰返し説き、かくて——犯重比丘も地獄に墮ちること無く、持戒比丘も生天を得ることはない。眞如實際に於いては犯重も墮地獄も持戒も生天も無差別一如であると説明する。

一一、今度は佛が——菩薩の、菩提座に坐して無上菩提を證せざる因縁があるかと——せらるゝに對し、曼殊は同段に空佛敎を證明して、——少法の菩提と名づくべきものは無い。眞菩提は性、無差別であるから、坐して得すべきもなければ、同じく坐して捨すべきもない——とし、更に進むで、一切皆空の立場より——無上菩提も五無間も同段に是れ假施設であると明かし、また——佛は即ち是れ如來ではない。何となれば、如來は眞智をもつて眞如を證するものであるけれども、妙智と眞如とは俱に離相であつて、自ら、眞如は實は眞如でないし、妙智もまた實は妙でない。従つて佛も當然實は如來ではないからである——云々といふ。

一二、次いで佛が——然らば、曼殊は如來を疑ふものか——と問はれたので、曼殊は——如來は已に不可得、無生滅である。であるから疑ふも何もあつたものではない——と重ねて空觀をもつて對へた。

一三、そこで、佛は——果してそれなら、今佛は現に出世するか——と問はれる。それに對し、曼殊は——諸佛の不可思議相は一境性であつて無生、無滅である。故に一切諸佛が同時に出世し、未來佛、過去佛の場合もまた準ず

る——とお對する。而して佛は——曼殊の説く所の如きは、たゞ、如來、不退菩薩のみよく解する所だ——と讃  
ぜられる。曼殊は更に——如來、不退菩薩は誠に能く了達して毀しもせず、又讃もしない。蓋し心も非心も共  
に不可得であるから——と釋し、且つ、異生心も佛心も心性は何れも平等不可思議である——とこゝにもまた皆  
空無相一如の義をのべる。

一五、(一)の最後の一段として、曼殊が引續き、佛陀論に約して空觀を述べ、——如來は、諸の有情類が本、無なのであるから、その中に於いて自ら最勝なるべき所以もない。次いで、實に不可思議法なければ、如來の、その不可思議法を成就すべき筈も無い。また、眞に説法してもつて調伏すべき所がないからして、如來は、諸の弟子に説いて調伏すべしとすべきこともない。かくして所詮、如來は世に出現しても、恩徳を蒙らせるといふことも無く、且つ本來、無上福田といふことが不可得であるから如來の、その無上福田であることもない——とする。その時、佛の威神力の故に、天地が六返震動し、阿難がその理由を佛に問ひ奉ると、佛は答へ教へられて、已にあげた如く、諸の會衆各々所得あり、法悦にあふれて、こゝに前分を終る。

### (二) 後分

一六、前分一切の空觀解説に對し、舍利弗がそれを不可思議と歎じたので、曼殊は進むで空觀を續説し、——この法相は可思議なく、不可思議なく、乃至それらの有無さへ不可説であつて、たゞ、音聲あるだけだ——と明かし、加へて、その音聲すらもまた不可得で、要之「一切法自性離」と説く。

一七、佛が右を聞き召して——曼殊の已に一切法不可思議とするからには、自ら不可思議三昧に入るものによ——と問ひ玉ふに答へ、曼殊は、かかる不可思議三昧さへまた不可得として、空觀を詮明する。

一八、曼殊は更に語を續け——不可思議定にせよ、餘の諸の定にせよ、右の如く已に相無得である。であるから、能く入るなどいふことのある筈はない。いな、逆にいへば、本來、一切有情が已に悉く不可思議定に入つてゐるもので、諸の心情は實に離性であり、離は體て不可思議定即ち空に他ならぬ——と詮明する。

一九、また曼殊の續説で——甚深般若は二想を遠離し、所住がない。有法に住せず、無法にも住しない。從來説き來れる所は要するにまたかゝる立場からした所のみ。故にそれは我想、有想に住して説いた所ではない——と空觀を又蒸し返してのべ、——是の如きの士は、般涅槃法を行せず、生死法を行せず、有身行に於いて能く滅寂行があるであらう。誠にそれは三毒に於いて斷に非ず不斷に非ざる底の士にして能く信解する所たるべしといはれる。

二〇、右に信解といふ語をのべたので、それをきつけに突然大迦葉が口を挟み、且つ、やゝ流通分的に、佛がその間に答へられて——上來の法は今の會中の苾芻等四衆が聽受し、修學し、流布すべきものなることをのべられる。

二一、佛が右に於いて、現當の善男子善女人らの、般若信解の狀相を明かせられたのを受けて、曼殊はまた空觀を詮述しかゝる信觀の狀相もまた狀相ではない。是れ不可得である——と稱し、佛がこれを「是の如し、是の如し」とて讚説せられ、而して「善根を集め、妙功德有らむと欲するものは應に般若を修學すべし」といふので、今まで紆餘を盡くして般若空觀を明かし來つた後を受けて、こゝに、かゝる空觀に至るべき般若を應に修學すべきことを

勸説される。

二二、曼殊は便ちそれを聞いて——而も一切不可得である。また何が故の勸説ぞや——とする。而して佛は——是の如し。而してその一切不可得の學こそ、即ち眞の般若修學であると——説かれ、「般若は無相、無名、不可得である。是の故に般若と名づく」と教へられる。

二三、また佛の、般若勸修で——般若修學こそ菩薩が菩提を疾得すべき法であつて、名づけて一相莊嚴三摩地とする——と記する。而して、「その三昧に入るべく、喧雜を離れ、無相を思議せざれ」とてまた空觀の説明に入り、三昧の無邊の功德勝利をあげる。

二四、右段の末に、一相莊嚴三昧が無上菩提を疾得する所以の法だとしたのに乘じ、佛が諸佛の無上菩提を得らるゝこととの、因縁に由るに非らず、由らざるに非ずといふ空觀をまたのべ、喩をもつて更に般若の學修を勧め、終に上同準に今の會中の比丘等が宿願力の故に、多く般若を信解するであらうことを附言する。

二五、曼殊の説かく、——もし般若を信解する者があつて、來つて如來の般若を宣説するの理由を問ふことあらば、當に佛説の諸法の、悉く違諍無く、又、實には諸の有情の能く佛説を信解する者も無く、一切は平等で、畢竟空なることを明かすであらう。而して、諸の有情は、爲に二想を起さず、應に遠離するであらうと。

二六、佛が、右の曼殊所説を聞き玉ひて、それを讚歎し、——そして般若修學のあらゆる功德莊嚴をあげられ、再び初頭以來の殊妙なる般若空觀はたゞ般若修學によつて可得なる所であるから、應に般若を修學すべしと勸説せら

れ、「是れ無上の法印なり。諸天神、共に守護す」と結ばれる。

二七、全文を結ぶ流通分で、已述のやうに、天帝釋等の諸天が散華奏樂し、帝釋は自ら般若を修學する有情を守護すべしと發願をのべる。而して、曼殊が佛に對し、般若受持の者云何を問ひ奉るに對して、佛は威神力をもつて天地を六返震動させられ、且つ、微笑して大光明を放ち、如來の是の如き神通力こそよく般若を守護するであらうことを覺らせられる。諸衆は何れも歡喜してこゝに全文を終る。――

便ち、初め四分の三ほどに於いて繰返し／＼般若空觀を説明し、そして残り四分の一ほどに至つては、「是の如き上妙なる般若空法であるから、應にこれを修學せよ」といふ風に勸説する邊り、説明態度の有機的なことと巧みであることとに如何にも感心させられるであらう。のみならず、さうした初め四分の三の間に於ける般若解説に於いても、――以上の解説中には隨分空といふ字を用ひたけれども、事實としては空の字を必ずしもさう澤山には表向きに出さず、フンワリと空の義を讀む人の心裡に印象させ、かくて空の意味を闡明するの態度をとつてゐるなど、論の立て方として、また如何にも上乘のものたるを思はせるに餘がある。例の金剛經に於ける周知の空説明も餘り簡に失し豫想的なるに過ぎるが、それかといつて大部諸般若の丁寧、懇切、反復的なものも必ずしも中庸を得るの以所ではない。かくしてこの曼殊般若に於けるその如きこそ、如何にもその宜しきを得、編者の手腕の妙なるをたゞ思はしめらるゝのみである。已にいへる如く、全體の量が手頃なことと共に、私見として、この經の、空佛敎に關する好適な一教科書たるべしとしたこと、所以なきに非ざるを解し得るであらう。

## 七、曼殊般若の佛典史的意義

曼殊般若が全體の量の手頃で、空觀の説明は有機的であり、且つ一、一の論式の簡に失せず、丁寧、反復的なるにも墮せず、寔に好適の一空觀教科書たるべきことは右いつた如くである。然るにかやうに全體的に殊勝であるのに加へて尙曼殊般若の個別的に著目さるべきものを含むことは相當多い。

即ちまづ第一に、右で、内容を略して紹介した中の、(一)の一に於いて關説した無動、無作、無所分別、無異分別、非即方處、非離方處、非有非無、非常、非斷、乃至無生、無滅、無去、無來等々といふのを初め、曼殊般若が諸法の實相、如來、眞如を説明した語句は隨處に可成り見出だされるけれども、これらは同列に小部枝末般若の一としての勝天王般若に於ける同様のものを想ひ起さしめると共に、あの龍樹の中論に於いて有名な不生不滅不常不斷不一不異不來不去の所謂八不の偈をまた反省せしめる。而してその龍樹の八不の偈に至つては、直接には瓔珞經佛母品中の二諦に關する八不説に負ふものなるべきことを已に嘉祥大師がその三論玄義に於いていつてゐる所であるけれども、更に溯つていへばさうした瓔珞經の八不がまた今いふやうな勝天王般若、曼殊般若の所説から漸次、整理、脱胎せじめられた結果でないことを誰がよく斷言し得る所だらう。従つてかやうな推移の途上に於ける自らの役割を演じた所かも知れないといふ意味に於いて、曼殊般若のさしづめまづ著目せらるべき一の意義あるは見逃すことを得まい。

而して次に同上の(一)の七で觸言したけれども、曼殊般若の中には女人が般若皆空の理をのべ、曼殊の説明を隨喜讚

仰したとある。所が考へて見ると、佛祖自らに於て以來、佛教に於ける女人の位置は頗る慘めにもまた衰れなるものであつて、「女人は梵行の垢」ともいはるれば、「女子と小人は養ひ難し」と説かれ、翻つては大部諸般若中、一切皆空無相無差別とせられる間に至つても、依然女人さながらの成佛は認められず、やつと變成男子而成佛道しか許されてゐぬ。而して是の如きは有名な、法華經の提婆達多品でもまた踏襲せられ、大集經、寶積經乃至阿彌陀經またすべて準じてゐる。故にかくて大觀し來れば、かやうな佛教諸經典間に於いて、教義の第一眞諦たる空觀般若の法門を女人が理解説明し、又、曼殊の空稱説を隨喜讚仰するなどは一寸豫想外とせらるべきの圖であつて、私はこゝに、翻つては奥義書中、初めて哲學を婆羅門から刹帝利族等に開放し、進むでは思想の高調するにつれて、鵝鳥その外の動物にも哲學を説かしめたと共に、また今同様婦人にも哲學を談せさせたのを想ひ浮べさせられるけれども、それらと併せて、何はとにかくに佛教諸經典間に於てさうした曼殊般若の有すべき最も重要な意義を思はせられない譯には行かぬ。無論さうした曼殊般若にしてもまたその本義を容赦なく吐露せしめたら、恐らくは右の大部般若、乃至法華、阿彌陀の諸經に進ずる所でもあつたかも知れないが、何れにもせよ、表はれた事實としては右の事實あるを人は何としても指摘せずにはゐられないものである。

更に第三には、主として玄奘譯だけが關する所ではあるけれども——その玄奘本をもつてしての(二)の二一を見ると佛が般若修學の功德を盛に列擧せらるゝ文中に、(一)……欲知佛說如來不能現覺諸法秘密義趣、(二)欲知……如來不能證諸佛法秘密義趣、(三)……不能證得無上正等菩提相好威儀無不具足秘密義趣、及び(四)……不成一切功德



て前已に、曼殊般若の空の説き方が、金剛經のそのやうに簡にも失せず、また大部諸般若のそのやうな繁にも墮せず、而してよくそれらの中間をとつて、寔に中庸を得てゐることをいつた所にも反省するならば、成立の上から、大體今の曼殊般若は、右の兩者の中間的產物でもなかつたであらうかと想像させる由さへもあるであらう。而して、かうした事實は偶、もつて所謂小部般若のすべてが、大體何れも同様に大部諸般若の教科書を制定する運動途上の產物ではなかつたと想像させる所以の一助たるべき者でもあつて、かたぐ、曼殊般若の空觀佛教に對する好適の一教科書たる意義は一層決定的になつてゆくのを思はしめられる。